

# 日本労働年鑑 第28集 1956年版

The Labour Year Book of Japan 1956

## 第一部 労働者状態

### 第四編 労働者の生活

#### 第二章 栄養

一般的な労働者の栄養状態についての実態調査としては適当なものがみられないので、ここでは主として紡績、製糸工場の宿舎における女子労働者の食事についてみることにする。(なお毎年掲さいしている厚生省国民栄養調査は、発表が遅れたため掲さいできなかった)。

#### 寄宿舍の食事

全国蚕糸労働組合連合会が傘下製糸工場の寄宿舍における給食について調査した(一九五五年二月)ところによると第188表のような状態になっている。この表は、傘下組合支部のうち報告のあった四八工場についての集計結果であるが、欠食した場合の食費負担状況では、多くの工場で支払わなくともよくなっているが、そのうち一三工場では一日一、二回の欠食にたいしてはその分を徴収されている。栄養やカロリーにたいする料理知識をもった栄養士もおらずに給食のなされている工場は非常に多く、三〇カ所にも上っている。衛生状況については、炊事場が清潔とか普通であるとかいわれる工場が多くなっているが、とくに不良状態にあるものが三カ所みられる、また炊事場の状態に反して食器の消毒状況は芳しくなく、消毒していない、夏季のみあるいは時々消毒するというのが一一工場ある。食卓に常備されている食品類は非常にまちまちで、一般に醤油、漬物、ゴマ塩程度となっているが、何も出されていない所が一工場に上っている。

またこうした給食施設において作られる食事の献立について、同じく全国蚕糸労働組合連合会の調査によってみると、その朝、昼、晩の内容は第189表および第190表の状態である。この調査は傘下各組合における一九五五年二月から三月にかけての二九日間の食事について行われたものであるが、ここでは、大企業、中小企業製糸のそれぞれの代表的な工場を選んで紹介した。この調査では料理に用いられた材料の量について調査されていないのが欠点であるが、まづ朝食(第89表)についてみると、主食は米、麦あるいは米・麦・外米の混ぜ合したものであるが、この表に掲げなかった片倉製糸の宮城県の工場では米・麦・稗という日が二九日間に一八日もあり、同じく片倉製糸の宮崎県の工場、郡是製糸の福島および広島工場ではパンのみの日が二日から四日あった。また飯の外に出されるのは味噌汁と漬物だけであるが、この味噌汁の中味は郡是、片倉製糸などで油揚げそれに一日一回豆腐が入る外は、大根、白菜、ねぎ、その他の野菜類が大部分である。次に一日のうちで最もよいとされている昼食の状態をみると(第190表)、煮物、汁物など出される日が多いが、その内容は玉葱、人参、大根、芋などの野菜類が多く、その油いためにがせいぜいのところである。魚や肉は郡是製糸や片倉製糸などの大企業(もちろん各工場によって非常に差があるが)が二〇日程度それを加える外、とくに中小工場の場合は一〇日以内となっている。但し肉や魚の分量の調査されていないのが欠点である。卵などはほとんど出されない。夕食(第190表)はほとんどが汁物と煮物である。その内容も郡是製糸の兵庫県の工場を除いて、大根、菜っ葉などの野菜が主体である。以上製糸工場の女子労働者は毎日ほとんど値段のやすい野菜を主とした単調な料理と麦や外

米の入った飯で働いており、ますます労働を強化されているのである。なお労働組合では給食委員会を組織して、食堂施設の改善や食事内容の向上のために努力しているが、郡是製糸高知工場ではこれについて次のような要求を行っている。

- 一、馬鈴薯の皮をむいてほしい。
- 二、ごたごた煮込んだものはやめること。
- 三、朝の味噌汁を少し変ったものにしてほしい。
- 四、月に一度位ちらし寿司を出してほしい。
- 五、食事中掃除は止めてほしい。
- 六、食べれないほど嫌いなものは他のものと交換してほしい。
- 七、残飯を次の食事に混ぜないこと。

table-209-191

## 日雇労働者の食事

福島県郡山自由労働組合が一九五四年におこなった組合員一六五名の実態調査によると、これら失対事業日雇労働者＝失業者の食事内容は、第191表の如く極めて悲惨な状態である。ほとんどのものが毎日朝は飯二杯に野菜のおかず、昼は漬物の弁当、晚はうどん二杯でおかずなしといった状態で、夕飯に御飯をたべるものは、一六五名中不明一名を除いて四名しかいない。また昼に弁当をもって来れないものが、一六五名中不明一名を除いて一四名、約一〇%近くもいる。少数の条件のよいものでも油揚げ、納豆などを一日一回程度用いるに過ぎない。しかもこうした食事で、土木作業に従事しているのである。なお当大原社会問題研究所が一九五四年一〇月福島県石城郡常磐市および山田村で行った失対事業日雇労働者の調査においても、同じように悲惨な状態がみられた。(この福島県郡山自由労働組合の調査は、家計、住居、衣服、布団、健康などについて日雇労働者の苦しい状態を極めて具体的に生々しく描きだしている。食事以外の状態についてはこの第四篇の各章でそれぞれ触れることにする。)

日本労働年鑑 第28集 1956年版

発行 1955年11月20日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2002年3月5日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1956年版(第28集)【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---